

芽 接 ぎ の 詩 集 (2)

8

BUSON'S REQUIEM

富 田 義 介

I'm coming! coming!
To where the moon's so bright
And plums are blooming white.

| × ㄥ | × ㄥ | ×
| × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
| × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |

しら梅に明る夜ばかりとなりけり

(蕉村)

① 蕉村の臨終の模様については暉峻康隆著「蕉村」に「二十四日の夜は死の前の静寂であらう、病状も静まり、言葉も常と変らず、月溪をよびよせて病中吟の筆をとらしめた。

冬鶯むかし王維が垣根哉

うぐひすや何ぞつかす藪の霜

二句を書きとめさせて、なお句案にふけつけていたが、しばらくして又、

しら梅に明る夜ばかりとなりけり

と吟じ、これには初春と題を置くべしと言ひ終ると聞もなく、天明三年(1783)十二月二十五日の早暁、六十八歳をもって歿したのであった。」とある。蕉村には胸痛(狭心症か)という持病があった。それが天明三年の五月ごろから悪化して、上記のとおり師走の廿五日の早暁に急死したのである。

② 「愚老此ほとは持病之胸痛に甚こまり申候。大かた天年も尽し候故、やがてアッチものと覚悟いたし心細く候。」と天明三年十月三日付け二柳宛ての手紙に書いている処をみると、死ぬる覚悟はしていたものの、妻のトモ女のことやまだ「世づかぬ娘が行末など」さすがに愛執のきずなの断ち難いものがあったようである。処がそれから死ぬるまで約そ九十日が間に、蕉村にはすっかり死ぬる覚悟が出来たらしく、いよいよ絶命の辞としては「しら梅に明る夜ばかりとなりけり」というすばらしい境涯の句を遺している。この句はただオモチばかりのツクリゴトの句ではない。もの深い作者の主観の裏づけがあるのだ。心してこの句を読むものは肉眼 'outward-Eye' をもって見るものの代りに作者のたましい(真空なる意識)による直観 insight or inward-Eye の世界の現象を覗いて見ることができるので、自分のこれからの生き

方についてプラスになる大きな影響をこの作品から被けるであろう。漢字の價と値とは、それぞれ所与 es gibt の世界のアタへ（与へ）と真空なる又は純粹なる意識によって開発することのできるアタヒ（能ひ）（可能性）を表示する語であると考えられる。

價²
1 3

1. イ=人
2. 面=𠃉 どぶろくを入れた壺
3. 貝=貝 あしを左右にひろげた女体の神聖なる部分、ツビ又はツミ（祇）のかみ、寶貝（cowry）がその象徴、昔は貨幣として広く用いられた。

それ故、價とは人間が欲しいと思う物例えば酒に対して売主に与える金目（かねめ）である。

値².....
.....4
1 3

- 1 = man's or one's. われら人間の。
- 2 = 9 + 1 = 10 which means 'ten' or 'full'. + は + (とを) 又は十分のこと。
- 3 = inner or inward. 内面的な。
- 4 = eye or sight. 見ること、観。

値 = what could be in evidence only through one's full insight.

人間の完全な直観をおしてのみ始めて現象するもの。

㊦ この句は、作者が最後に到達した悟入の境涯を端的に表現したものである。筆者は「毒語注心経提要」なるものを読んでいた時、「心」の条下に「半窓の明月梅を帯びて来る。」という頌語のあるのを見てはッ！と思った。途端に、蕪村のこの辞世句の意味を直観することが出来た。と同時に、筆者はペンをとって上掲のごとくこの句を英語のストックに芽接ぎをすることができた。反訳し了って筆者はくり返しくり返しこれを読誦するうちに実（まこと）に微妙な気持ちになった。「真空妙有」だとか「真空妙用（みようゆう）」だとか禅家のいうのはこのような気持ちだろうか？などと考え考え自分の頭を右の掌（てのひら）で撫でた。撫でながら文学することの楽しさを楽しみじみと想うた。これだから芭蕉も蕪村も死に到るまでこの一筋につながって生きて行ったのだと私は考えた。

㊧ 固より一句の真底は、これを読む者のひとりびとりが自分の心の昏沈と散乱の気を鎮めて、真空の状態に己れの主観を置かなければ、捕捉しがたい。「あなたのその茶碗の中にいま入れてある濁った水をお捨てなさい。でなければ、それに清水を入れて飲むことはできないでしょう。」と禅家はいう。現在自分がそれで在るがままの自分すなわち即自（en-soi）を無化（néantiser）することなしには、主体性をもって可能性の世界すなわち値（能ひ）に向って自分を投げかけ投げかけ se projeter して進んでゆく本当の自分すなわち対自（pour-soi）は自由なる自己創造 se faire の行為をなすことが出来ないのだとサルトルはいう。百尺竿頭更に一步を進めてゆくこ

とこそ本当の自分の在り方であると禪家はいう。まことに味うべきことばである。本当の自分の在り方 *pour-soi* のことを禪家は「本来自性」というて居り、われわれの意識の真空状態、すなわち純粹なる意識において「本来自性」を直観して *pour-soi* そのものになりきる事を「見性」というて居る。随時随処において意識の真空状態に入って本来自性を直観しうることをサトリ（悟り）と云うて、大乘仏教、特に坐禪宗（略して禪宗という）ではこれが雲水（修行者）たちの究意目的となっている。サトリを得た者は、大無量寿経によれば、「心得開明」と云い「開神」と云い「悦体」というて気持が急に明るくなり、自者と他者との差別が無くなるから孔子と同じように「われ、なむちに、かくすところなし。」と云った開放的な気持ちになり、「相摂相入」あるいは「相即渉入」というて（これは筆者の師家に当る Walt Whitman の言う 'efflux and influx' に相当することばである。）自由に他者を自分の中に取り入れて自有化 *s'approprier* することができ、他者もまた自由に自分を他者自らの中に取り入れて自分のものとするのであるから、主体性の座である自者の体と他者の体とがつながって一つになる。そのとき自分の体に大きな悦びが発（おこ）るのを主体者なるオノレは感ずるのである。その悦びが自分から自分が脱け出していく「脱自」の悦び *extase* である。それなのにサトリ無き下凡のわれわれにはその脱自のチャンスが性的恍惚 *orgasme* の一瞬時にのみ限定されてあるとは、自分の生き方について主体性をもっている 筈のわれら人間の生き方の何んと貧困な、ケチな、アワレなものに成りさがったことではある！

O HYMEN! O HYMENEE!

Why do you tantalize me thus?

O why sting me for a swift moment only?

Why can you not continue? O why do you now cease?

Is it because, if you continued beyond the swift moment, you would certainly kill me?

と、ホイットマンが慨歎しているのは、そのことである。もしもこのままで、こんなケチな生き方で吾々が一生を終わるとしたら、人の一生は巻煙草の吸いくさしの一つにも値いしないことに成るのではないか？

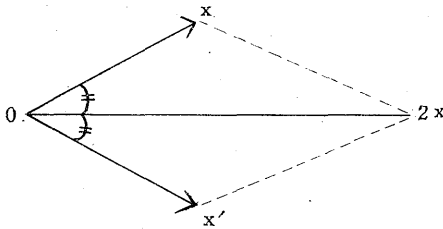
㊦ かような疑問に答えて、下凡な吾々に価値ある人生の生き方を教えてくれるものが宗教であり、芸術であり、文学であり、スポーツであり、科学である。いずれも下凡の吾々に、いま、ここに、在るがままの自分を脱け出して、自分がこれから在らねばならぬと意識する値＝能ひ＝可能性をめぐって自分を投げかけていく行為の中に不易なる脱自の悦び *extase constante* を酌みとるべきことを教えておる。所与（アタへ）の世界から、いうなれば電位差のある可能（アタヒ）の世界へと吾々の生命のエネルギーを移しながらしていくためには、所与の世界での性愛の代りに「空愛」すなわち清烈なる愛情という別種のトランス（変圧器）を使用しなければならない。筆者

の師家のホイットマンはこの空愛のことを男性の場合は ‘manly love’ 女性の場合は ‘athletic love’ と云い両者を併せて ‘the merge’ 又は ‘the magnetic’ と云う。

⑥ 「空愛」とは、既成及び既存の価値を保守しようとして対自の竿頭進歩を拘束しようとする即自の逆行率 *coefficient d'adversité* を埋めてこれを完全に無化する対自の無化率 *coefficient de néantisation* を加えることによって得られる真空なる（又は純粹なる）意識の機用（きゆう）をいう。（機用とは禅家の用語、禅家は亦これを真空妙用ともいう。）今仮りに即自の逆行率を x' であらわし、これに対する対自の完全無化率を x であらわすとすれば次のような簡別的な意識の可能性の根源的な増加率が得られる。但し $x' = x$ とする。

$$x' + x = 0 \rightarrow 2x$$

さらにこれを平面幾何学的合力の作図であらわすと



となるのである。大乘仏教の教理ではこの作図における x の力を因と名づけ、 x' の力を縁と名づけ、われらのすべて *tout le monde* が因縁弁証法的な脱自という非連続の連続の過程の上にあるべきものと観ておる。

⑦ 細註(1) T.S. エリオットの詩劇「教会堂の殺人」(1935)において、コーラス女たちの全体総合的な x' の力の方向は ox' の線で、ベケットの殉教という絶対無化力 x の方向は ox の線で、これを示すことができる。両者の力の方向の食い違い ‘discrepancy’ すなわち差角は $\angle x \circ x'$ でこれを示すことができる。

⑧ 細註(2) ジョイスの「ユリシス」二部(四)をみると「ブルーム氏の一日」すなわち1905年の六月十六日がこれから始まろうとする朝のこと、ブルーム氏が便所に入って大便をしながら、自分のお尻の下からほのぼのと立ち昇ってくる頗るアンチームな香りを楽しむところがある。あれはブルーム氏の脱自行為 $2x$ に相当するもので、すでに自分の即自(からだ)から疎外 *aliéner* されて、所与の世界の只中なる事物存在と化した物へのしたたかな郷愁と愛着を覚えて因縁弁証法的な脱自行為(サルトルのいう自由なる行為)をなしつつあるので、かような行為にまで彼を駆りたてるものは真空なるブルーム氏の意識 $= 0$ の妙用である。自分が放(ひ)った屎と相撰相入

efflux and influx して屎そのものに成りきっているのである。中国宋代の禪僧で無門慧開という偉い坊さんが昔から有名な公案48則を集めこれに頌と評唱とを添加して禪宗無門関という一冊の本を作った。この公案集の第1則の著語として「いかなるかこれ祖師の関？只この一箇の無の字、すなわち宗門の一門なり。ついにこれを目して禪宗無門関という。」とある。その意味は、坐禪宗（略して禪宗という）の雲水たちの目ざすところは、真空なる意識すなわち絶対の無の心境を *réalizer* することにある。悟りの境地に到る道路には別に門というものは無いが、完全に昏沈と散乱の気を払拭した絶対の無 *néant absolu* の意識状態をわかること無しには、とても悟りに入ることは出来ないで、坐禪宗の奥儀を究めて悟りの境地に到る道路に「無」という無門の関所があるわけだと云うことである。その無門関の第21則に云わく「雲門、僧のいかなるか是れ仏？と問うに因（ちな）み、門云わく、乾屎橛（かんしけつ）！」と。その意味は、雲門禪師にある雲水が仏ってどんなものでありますか？と訊ねたところ、雲門和尚は、コエダメに行ってみろ、屎（くそ）がコチコチに乾いて上の方に固まっている、農家の人が板で作ったでかい屎掻きべらでその屎の上皮をこき取って肥料桶に入れて畑へ持って行くじゃろがア。あの屎掻きべらと同じ物じゃ、仏というものはナ、と答えたということである。われらが真空なる意識の主体となれば、相即渉入して世界の只中なるすべての存在（禪家はこれを万法という）と一つになり、完全なる脱自を *réalizer* することが出来る。乾屎掻（くそかきべら）とても相即渉入して一つのものとなりきる事ができたら、仏は汝の意識の中に現前するであろうと雲門和尚は云いたかったのである。ブルーム氏がほのぼのと立ちのぼる頗るアンチームなわが屎の香いを嗅ぎながら脱自する場合と較べて見て興味ある平行線を読者は発見されないであろうか。

⑨ 細註(8) *Sacrée Dame!* とか *Mon Dieu!* とか *Gee!* とか *My (God)!* とかいういわゆる誓言 *oath* なるものは、簡別的な可能性（アタヒ）に向って意識の主体者（*pour-soi*）が自分を投げかけて行こうとする時のスプリングボードの役目をするものではないかと筆者は考える。考えように依っては日蓮宗の南無妙法蓮華經、念仏宗の南無阿彌陀仏も *oath* の一種であると見ることが出来る。ただこの種の誓言は、これを間断なく熱心に繰返すことによって段々と信者の意識の真空化（又は純粹化）を促進しよう、そして坐禪宗の修行者と同じような、呑むしろそれ以上の完全脱自を遂げようと企図するものである。と筆者は観ておる。いうなれば、踏み切り板の徹底利用を企図するものでそれはあるのだ。キリスト者のお祈りなるものも、ややこれに近い対自の脱自手段である。キリスト者のお祈りはクエーカー一派すなわちフレンド教会の信者たちのお祈りにおいてその完全さの頂点に達する。この派の信者たちがひとりぼっちでするお祈りは坐禪宗者の坐禪に最も近い心構えでなされる。彼等は、中国や日本において開発された祖師禪の行者と同じように、即時、即処における即身に対する新しい真理の啓示を求めて意識の主体者であり責任者でもある対自（彼

等はこれを内なる光と名づけておる）にこれを祈りながら無念無想の状態におのれの意識を置こうとするのである。筆者の師尚であるウォルト・ホイットマンの宗教思想は直接的にも又間接的にもクエーカー派の信者たちのこのような坐禅的な生活の姿勢によって甚大な影響を与えられたものである。「碧巖録」第6則の中にある「日日これ好日」という雲門禪師のことばがぴったりと適合すると思われる人間の生き方の在りようが、クエーカー派の篤信者のそれであり、ホイットマン及びホイットマン愛好者らのそれであることを知った時の筆者のよろこびは非常なものであった。

そのクエーカー派の信者たちが、誓言することを廃めた最初のキリスト者であった。それは何故であろうか？

⑩ 句道に書道にまた画道にも精進した蕪村はその晩年、しかも最後の約十年間における彼の脱自的努力は彼の年齢を考えると眼を見張るほどの物があった。この時期における作品のうち最も秀れたものをいま一つ挙げてみろと云われた場合筆者の推挙する作品は、最近に至って発見された「狐啼てなの花寒き夕べ哉」でもなければ「うき我に詰うて今は又止みぬ」でもない。

底のない桶こけ歩行（あるく）野分哉

Runs and trundles there

Before the searing blast

A bottomless keg around and fast!

(×) ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	
× ㄥ	× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

という頗る近代的な感覚を捉えた作品である。蕪村の主観は野分の風に吹かれてころげあるく、さきやかな、事物存在にさえも相摂相入して分ちがたく一つの存在となりうる迄に真空な、純粋な、意識の中に内在していたのである。この句は、そのような境涯の句であるから、さきの「狐啼てなの花寒き……」や「うき我に詰うて……」の句のように変に古いテーマを取り繕ったところも、技巧を弄して粉飾した跡もない。飄々とした新たな脱自の悦びがおのずから其処ににじみ出ている。

⑪ 「葛藤集」第26則に――

「香巖（きょうげん）智閑禪師、一日草木を芟除す。礫をもって竹を撃って声を作すに因み、廓然として省悟す。乃ち頌をのべて曰く「一撃に前知を忘す、更に修知を仮らず。動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず。処処に蹤跡なし声色に威儀を忘す……」

とある。香巖撃竹という有名な古則であるが、蕪村のこの句は筆者にすぐさま香巖

撃竹の故事を想い起させたほど感銘のふかいものであった 2x のポテンシャル・エネルギーが空愛のトランスをとおして自分の魂の中に流れこんでくるのだから、次に来る自由なる投企への猛烈な勇氣と力を真空なる意識の主体者は覚えるであろう。悄然の機に墮せずとは、そのことである。そればかりではない。空愛の *efflux and influx* は、どの路をどの様に通って行われるものやら更にその蹤跡が無い。ただぼさっとして起ったり坐わったりしている間に行われるのだから、別に声色を励ましてどうする、こうする、と云ったわけのものではないのだ。それが昔からわれわれ人間の本来の生き方だったのだよ、云々と香巖は言うておるのである。蕪村のこの句には多分のユーモアさえ漂っていて、実(まこと)に読む者の心を楽しませてくれる。野分の風に吹かれてこぼれてあるく底のない桶をとおして、脱自の姿勢にある作者の主観の「軽み」の世界——不断 *constant* に脱自に脱自を重ねて行く真空なる意識すなわち自然虚無身(じねんこむしん)の世界——不易にして流行するものの世界——随縁真如の世界——キリストのいう「こころの貧しい人たち」の世界、あるいは「こころの清い人たち」の世界をちよっぴり覗(のぞ)かしてくれるからである。覗いて見たらどんなものが見えるのだろうか? すぐれた俳句の作者たちは、17 *kana syllables* という世界最短のエピグラム形式をもって、そのものズバリの不易にして流行する真空な意識の妙用をことばをもって象徴して私たちに伝達してくれているのである。心の貧しい人たちが持つことのできる天国の有様を時々刻々にわれらに伝えてくれるのが日本のすぐれた俳句作者たちであり、心の清い人たちのみが見ることのできる神あるいは仏の相(すがた)を時々刻々にわれらにレポートしてくれるのが日本の優秀な俳人たちの仕事である。現在日本には所与の世界の新聞は見なくとも値(*potentiel*)の世界の消息を伝える俳句の雑誌だけはぜひとも見たいという人たちが4,000,000人もいるそうである。これほど沢山の新種の雲水が——これほど沢山の新種のキリスト者が現在日本にはいる。短歌を作り、あるいはこれに強い興味をもつ人たちをこれに加えたならば、その数は更に殆ど倍加するかも知れない。このことは凡そ日本文化に興味をよせる人たちの無視することを許さない重要な事態である。

9

「草の葉」詩抄(Ⅳ)

「草の葉」詩抄(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)はすでに北九州大学外国語学部紀要に発表した。内容は *Song of Myself* §1—§41 の反訳であり、本稿はその続稿である。「草の葉」とはアメリカ第一の詩人 *Walt Whitman* (1819—92) の詩集 “*Leaves of Grass*” のこと。訳文は筆者のいわゆる「芽接ぎの詩」であるから逐字訳では決してない。日本の文化的風土に活著するように育成された新種のクサノハで、たとえ

ばイタリアの風土にうまく合うように作られた「イタリア・ポプラ」や、日本の風土にたくましく育つように合成された「王子ポプラ」のようなもので、つまり 'Leaves of Grass' という大層難解なアメリカ文学を readable な日本文学に仕立て直そうというものである。

わがうつそみのうた

Song of Myself

42

これよりは衆生に廻向するべし。化衆生の歌を放たむ。
雲のごとき衆に向ひてこの歌を放つ。自然虚無身の大力の歌あり。その音きこえざる
鳴神のごとし。
いざ近寄りて来よ、わがうからよ、わが友よ、亦復われらがはらからよ。
いざいざ来れ、をのこよ、亦めのこよ。

求菩提の序の歌は悠暢としてこころよかりき、化衆生の破急の歌は更によからむ。
首を回らして歌ひいづると雖も
わがうたは、咽喉よりいづる唄にあらず。聴聞の衆雲の如くなれど、わが傍に居て耳
を傾くるにあらず。まさに住むところなきの声なればなり。

悟りなき者どものあわれき！自然は全機（いちまいのいのち）に非ず。大地は土石の
ひろがりに過ぎず。山川草木ただその上に在り。無機（いのちなき）の死に物な
り。生也全機現、死也全機現、というは禪者の寢言なりと思へり。

悟りなき者どものあわれき！人は食いて飲みて交みて死す。日は昇りて沈み、風は吹
いて止み、潮は差して引く。ただそれだけの事なりと思へり。

悟りなき者どものあわれき！己れは己れ、他人は他人なり、たのしきは酒と色との外
には無しとのみ心得たり。

悟りなき者どものあわれき！何故かは知らず、寄るときはると、情事のはなしなり、
衝き立つものなやみなり。

悟りなき者どものあわれき！悪事を働きサツに追はれて隠るるや探しだされて突き出
さる。

悟りなき者どものあはれき！為す所は相思ふ事ばかりなり。五陰盛苦の苦しみに遇
ふ。

悟りなき者どものあはれき！兇悪の罪を犯して捕へられ、願をロップにのせて絞め首

にあふ。惘れというもおろかなり。

A call in the midst of the crowd;
My own voice, orotund, sweeping, and final.

Come my children;
Come my boys and girls, my women, household, and intimates;
Now the performer launches his nerve — he has pass'd his prelude on
the reeds within.

Easily written, loose-finger'd chords! I feel the thrum of your climax and
close.

My head slues round on my neck;
Music rolls, but not from the organ;
Folks are around me, but they are no household of mine.

Ever the hard, unsunk ground;
Ever the eaters and drinkers — ever the upward and downward sun —
ever the air and the ceaseless tides;
Ever myself and my neighbors, refreshing, wicked, real;
Ever the old inexplicable query — ever that thorn'd thumb — that breath
of itches and thirsts;
Ever the vexer's hoot! hoot! till we find where the sly one hides, and
bring him forth;
Ever love — ever the sobbing liquid of life;
Ever the bandage under the chin — ever the tressels of death.

迷える者どもの悲しさ! 銭を目当てにうろろうと歩く。

口と腹とを充きんとするなり。日ひるにも夜にも瘦せる思ひす。餓鬼道というものなり。

迷える者どもの悲しさ! 切符の売り買ひばかりして、己れは一度も宴席に坐らず。蠅よりしがなき暮らしなり。

迷える者どもの悲しさ! 多勢の小作が、わずかの地主に使はれて、汗にまみれて働く。さて働きて得るところ、わらともみがらばかりなり。

あとは旦那の丸もうけなり。まことに仏のみち、衆生の愛、いづこに有りや? 墮つる

地獄は目の前にあるなり。

迷へる者どもの悲しき！ここは我が居る都会なり。目をあげて見よ。居る人、がめつ
い同士なり。政治のこと、新聞のこと、戦争のこと、市場のこと、慈善会のこと、
学校のこと、金魚が^ま駄をばらぎるが如し。
改正のこと、銀行のこと、関税のこと、汽船のこと、工場のこと、在庫のこと、不
動産のこと、私有地のこと、欲の皮の突ッ張り合いなり。狸と狐の化かし合いな
り。悪趣外道というはこれなり。

Here and there, with dimes on the eyes, walking ;
To feed the greed of the belly, the brains liberally spooning ;
Tickets buying, taking, selling, but never in to the feast going ;
Many sweating, ploughing, thrashing, and then the chaff for payment
receiving ;
A few idly owning, and they the wheat continually claiming.
This is the city, and I am one of the citizens ;
Whatever interests the rest interests me — politics, wars, markets,
newspapers, schools,
Benevolent societies, improvements, banks, tariffs, steamships, factories,
stocks, stores, real estate, and personal estate.

迷いの世界の笑止さよ——蚤にも似たる小人あり、その数知れず。燕尾服召して馬
車に乗り、びんびんとび歩き追従言いて生き血を吸う。やんごとなきの蚤どもな
り。

かのざれ歌は^{そらごと}虚言ならんや。

さりながら、^{かくねん}廓然としてめざめ来れば、悪人外道ことごとく随縁のほとけなり。

めざめ来りて行へば、その言ふところ為すところ、みなみな菩薩の^{きやう}行となるべし。
めざめ来りて行へば、悪人のぼさつ、外道のぼさつ、ホイットマンという外道皆、
皆、無位の真人となる。

わがことは、独立独歩のうたよみなり。

だらだらとして、取りとめのなき歌よみなり。^{けなら}日並べて空々の歌をつくる。

しかあれど、同行ひとしく心を開き、わが三密に触れて目覚めん。

The little plentiful mannikins, skipping around in collars and tail'd coats,
I am aware who they are — (they are positively not worms or fleas.)

I acknowledge the duplicates of myself — the weakest and shallowest is
deathless with me;

What I do and say, the same waits for them;

Every thought that flounders in me, the same flounders in them.

I know perfectly well my own egotism;

I know my omnivorous lines, and will not write any less;

And fetch you, whoever you are, flush with myself.

わがことは、平凡のことを申さず。婆々の談議を用いず。

卒然として借問するなり。そのことば唐突なれど微妙なり。しろがねの針のごとし。

魂を刺して直下に事々の実相を知覚せしむ。一超直入如来地というものなり。

美しき製本の、亦印刷の、本あり。借問す。何事の機用に由りてこれあるか？曰く、随縁真如。（そのぼそのぼのほとけなり）。印刷屋どのの機用なり。

懐しげなる写真あり。借問す。何事の機用に由りてこれあるか？曰く、随縁真如。

鋼鉄ばりの怖ろしき黒船あり。大砲あまた砲塔に据えたり。借問す。何事のおんはたらきにてこれありや？曰く、随縁真如。艦なる人の機用なり。

居心地よげなる家々あり、又そのよろしき部屋々々あり、又その飲食の馳走あり。借問す。この善きもの、何事のおんはからいにてこれありや？曰く、随縁真如。そこのなる人の機用なり。

仰げば悠々として飛ぶ雲あり、蒼き空あり、世界あり。借問す。世界は世界に非ず、是を世界と名づく、そもさん(作麼生)？曰く、亦随縁真如。家なる人の機用なり。

世にいやちこの信条あり、いかしき神学というものあり。

歴史に名高き聖徒あり、はたまた賢者というものあり。

借問す。何事の因縁にして、それありや？曰く亦随縁真如。菩薩どのらの機用なり。

借問す。われらの理性といふは、いんも(怎麼)ぞ？愛情といふは、いんもぞ？

生命といひ、自由といふは、いんもぞ？曰く、真空妙用。みえぬほとけのはたらきなり。

No words of routine are mine,

But abruptly to question, to leap beyond, yet nearer bring :

This printed and bound book — but the printer and the printing office-boy?

The well-taken photographs — but your wife or friend close and solid in your arms?

The black ship, mail'd with iron, her mighty guns in her turrets — but

the pluck of the captain and engineers?
In the houses, the dishes and fare and furniture — but the host and
hostess, and the look out of their eyes?
The sky up there — yet here, or next door, or across the way?
The saints and sages in history — but you yourself?
Sermons, creeds, theology — but the fathomless human brain,
And what is reason? and what is love? and what is life?